【作者】賈至（七一八～七七二年）中国・唐の詩人。洛陽（河南省）の出身。字は幼幾（ようき）。一説には幼隣（ようりん）。賈曾の子。七三五年に進士に及第、さらに七五一年明経（めいけい）に及第、起居舎人・知制誥（ちせいこう）に至った。安禄山（あんろくざん）の乱のときには、玄宗に従って蜀へ避難し、帝位を皇太子に譲る勅語を起草した。その後、一時罪によって岳州（湖南省岳陽）に流され、そこで李白に会い、酒宴に日を送ったこともある。その落ち、都に召還され、七七〇年には京兆尹兼御史大夫となり、右散騎常侍に至った。

【語釈】＊春思…春の長閑（のどか）な気持ち。　＊歴亂…花の咲き乱れるさま。入り乱れるさま。　＊李花…スモモの花。
＊東風…春風。　＊吹愁去…愁いを吹き去る。　＊愁：春愁。春の物思い。春のわびしさ。　＊吹去…を吹き飛ばす。…を吹き払う。＊偏…ひとえに。ひたすら。一途に。意外にも。

【通釈】草の色は、青青として柳の（新芽の）色は黄金色になって。モモの花が咲き乱れて、スモモの花が香っている。（わたしの）春の物思いを吹き払ってはくれないので。春の一日は、ひたすらよく悔恨の念をひきおこしている。